

# 川崎市アレルギー疾患患者等実態調査結果（概要版）

## 1. 調査の概要

### （1）調査の目的

川崎市では、アレルギー疾患対策基本法に基づき、令和5年6月に「川崎市アレルギー疾患対策推進方針」を策定した。アレルギー疾患患者等の実態把握を行い、今後の川崎市における総合的なアレルギー疾患対策を進める上で参考となる情報を得るため、小児から成人まで幅広い世代を対象に実態調査を実施した。

### （2）調査実施方法

#### ア 調査対象者

- ①小児：令和5年12月時点で川崎市在住者のうち、次の対象を満たす者の保護者とした。
- ・0-1歳児（2022年12月2日～2023年6月1日生まれの0歳6か月～1歳児）
  - ・3-4歳児（2019年4月2日～2020年4月1日生まれの3～4歳）
  - ・小学1年生（2010年4月2日～2011年4月1日生まれの6～7歳）
  - ・中学1年生（2009年4月2日～2010年4月1日生まれの12～13歳）
- ②成人：民間調査会社の調査パネルを利用し、川崎市に在住する20歳以上を対象とした。

#### イ 調査方法

- ①小児：回答フォームにアクセスできる二次元コードを示した調査案内文書を郵送し、オンライン回答フォームで調査した。
- ②成人：民間調査会社のWEBアンケートで調査した。

#### ウ 調査期間

- ①小児：令和6年1月17日～令和6年2月16日
- ②成人：令和6年2月7日～令和6年2月14日

#### エ 有識者からの助言（令和6年3月時点）

調査設計にあたり、医療従事者である有識者2名から助言をいただき、調査項目に反映した。

- ・中村陽一先生（横浜市立みなと赤十字病院 アレルギーセンターセンター長、日本アレルギー学会専門医・指導医、医学博士）
- ・福家辰樹先生（国立研究開発法人国立成育医療研究センター アレルギーセンター総合アレルギー科診療部長、日本アレルギー学会専門医・指導医、医学博士）

### （3）回収数

#### ①小児

3,386人（配布数8,400人、回収率40.3%）

- <年代別>
- 0-1歳児：874人（配布数2,100人、回収率41.6%）
  - 3-4歳児：798人（配布数2,100人、回収率38.0%）
  - 小学1年生：905人（配布数2,100人、回収率43.1%）
  - 中学1年生：809人（配布数2,100人、回収率38.5%）

②成人

4,123 人

<年代別> 20-39 歳 : 1,402 人 40-64 歳 : 1,932 人 65 歳 : 789 人

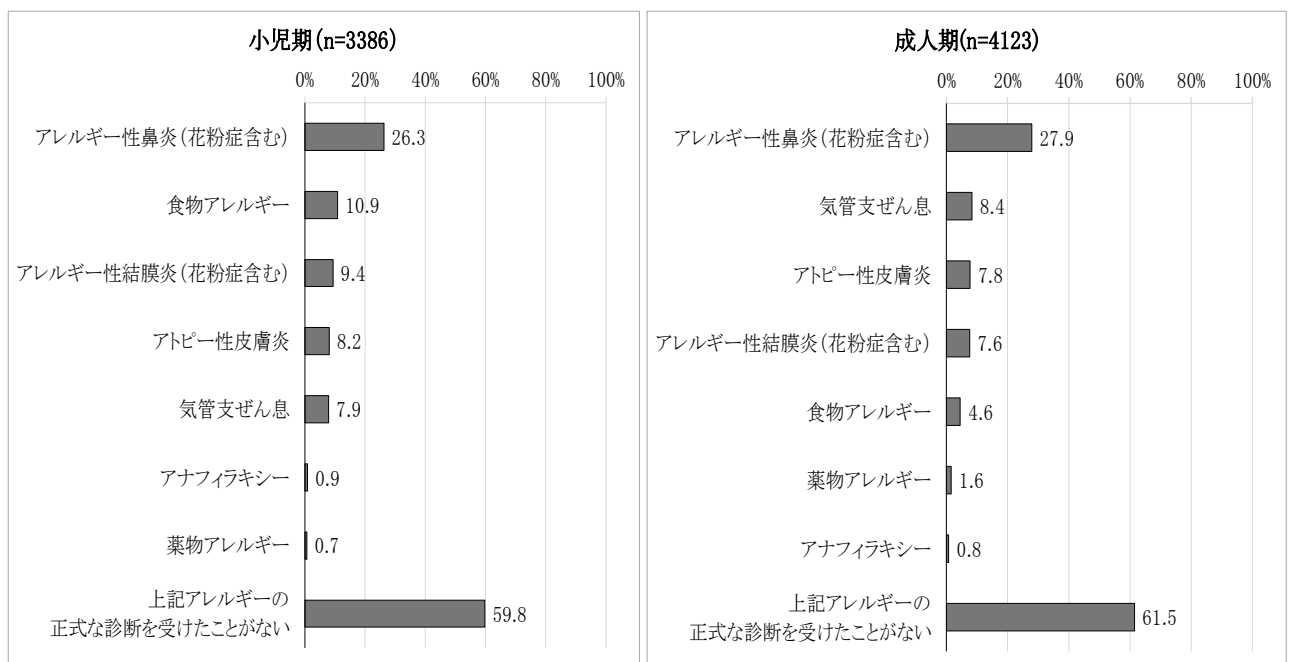
2. 調査結果の概要

(1) 市民のアレルギー疾患・症状の発生状況

①これまでに診断を受けたアレルギー疾患

問：「あなた（成人向け）／お子さま（小児向け）」がこれまでに診断を受けたアレルギー疾患をご回答ください。

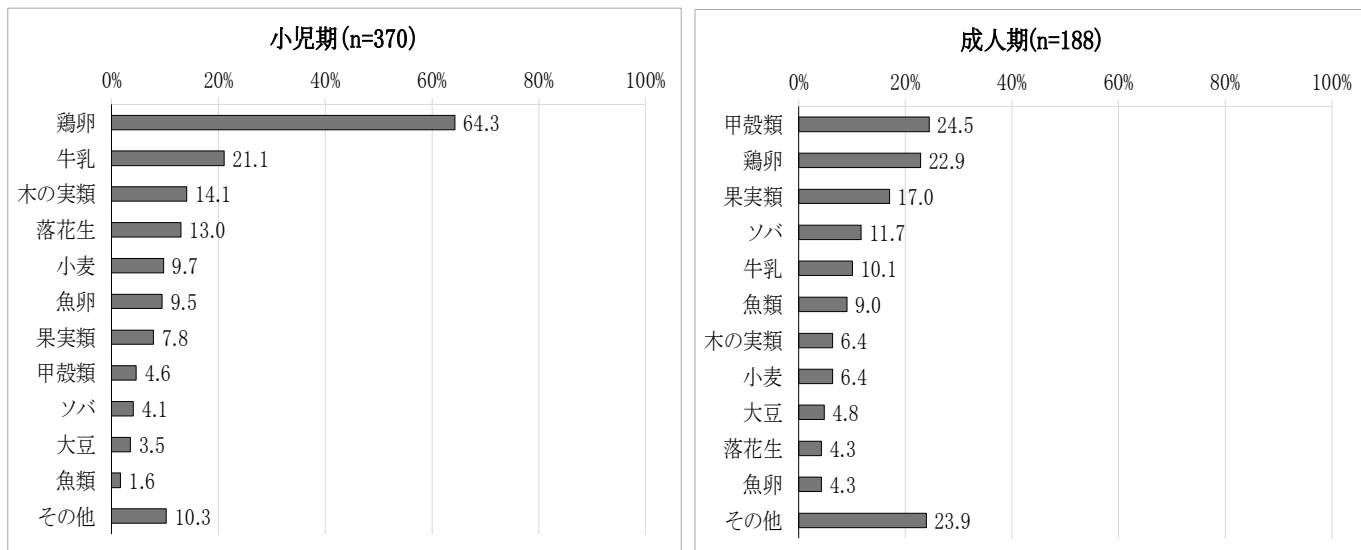
診断を受けたアレルギー疾患は、小児期、成人期ともに「アレルギー性鼻炎（花粉症を含む）」の割合が高く、3割近くあった。年代別では 0-1 歳で「食物アレルギー」が「アレルギー性鼻炎（花粉症を含む）」よりも高かった。



## ② これまでに診断を受けた食物アレルギーの種類

問：「あなた（成人向け）／お子さま（小児向け）」がこれまでに診断を受けた食物アレルギーの種類をご回答ください。

小児期では「鶏卵」64.3%、成人期では「甲殻類」24.5%の割合が高かった。また、年代別では、0-1 歳児から中学1年生までは「鶏卵」の割合が高い一方で、20-39 歳から「鶏卵」の割合は減少し、「甲殻類」や「果実類」の割合が増加していた。

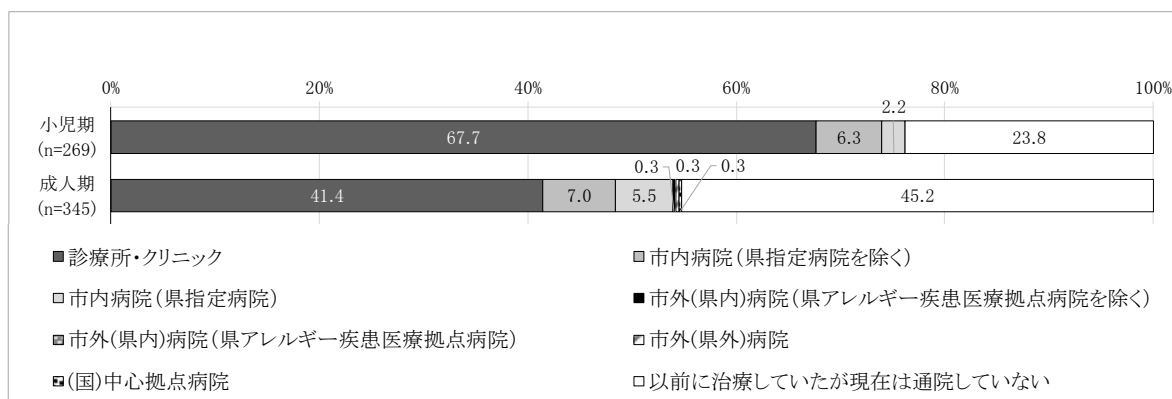


## ③ 通院している医療機関の種類別

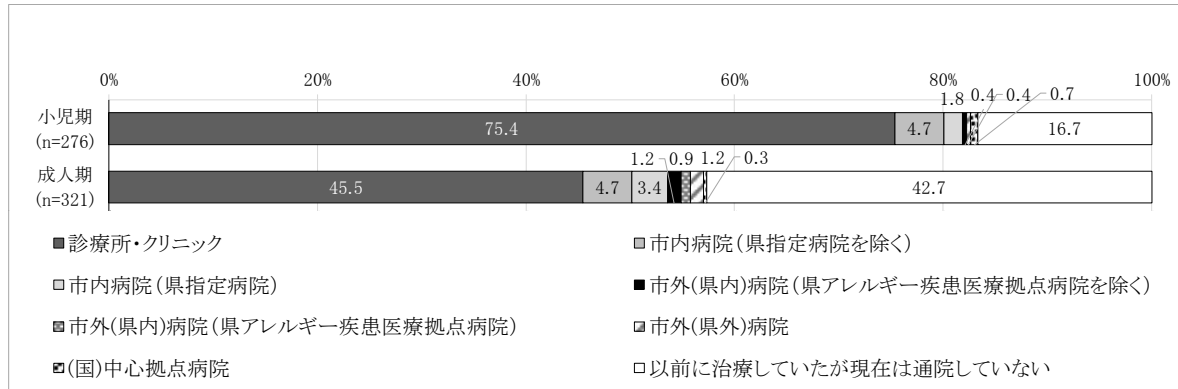
問：「あなた（成人向け）／お子さま（小児向け）」が現在アレルギー疾患で通院している医療機関の種類別をご回答ください。

通院している医療機関の種類別はいずれの疾患においても「診療所・クリニック」が多かった。

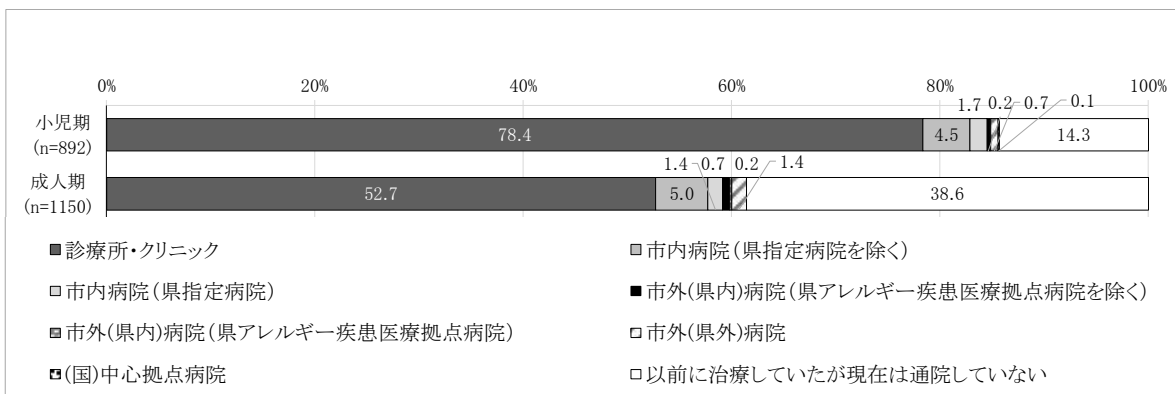
### a) 気管支ぜん息



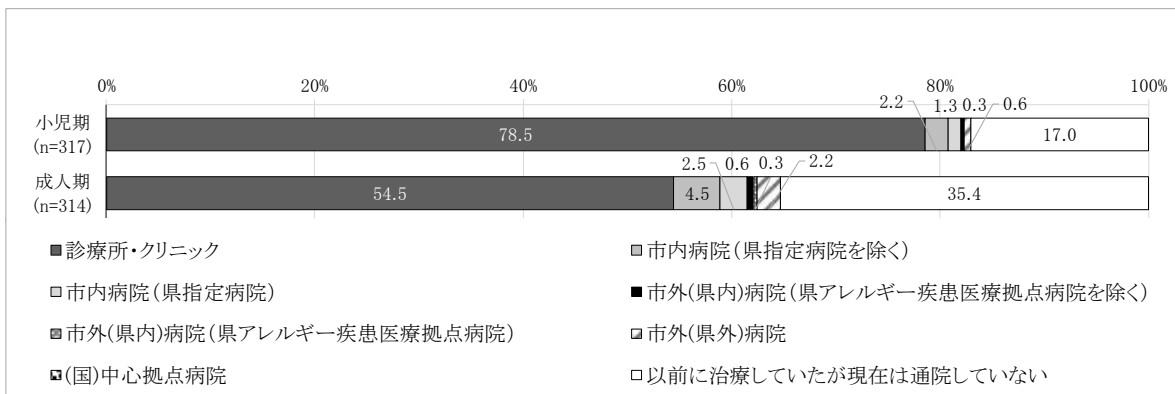
b) アトピー性皮膚炎



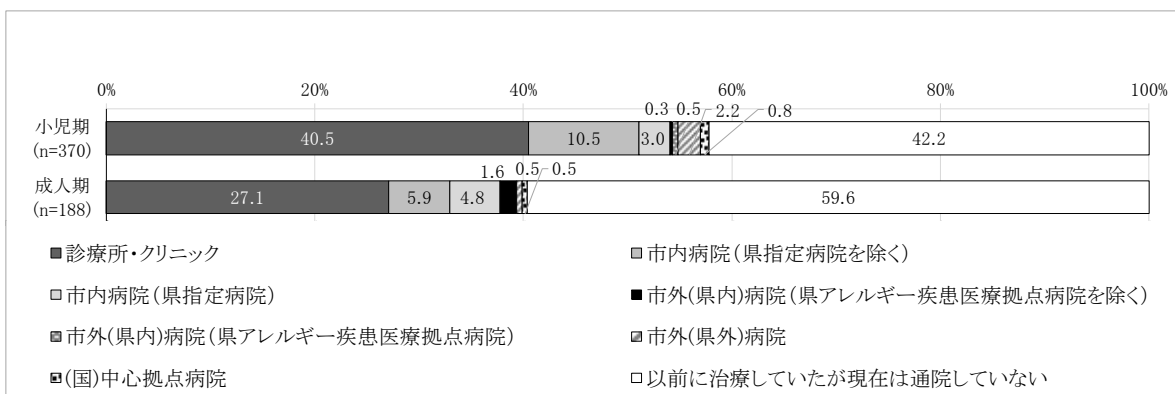
c) アレルギー性鼻炎 (花粉症を含む)



d) アレルギー性結膜炎 (花粉症を含む)



e) 食物アレルギー

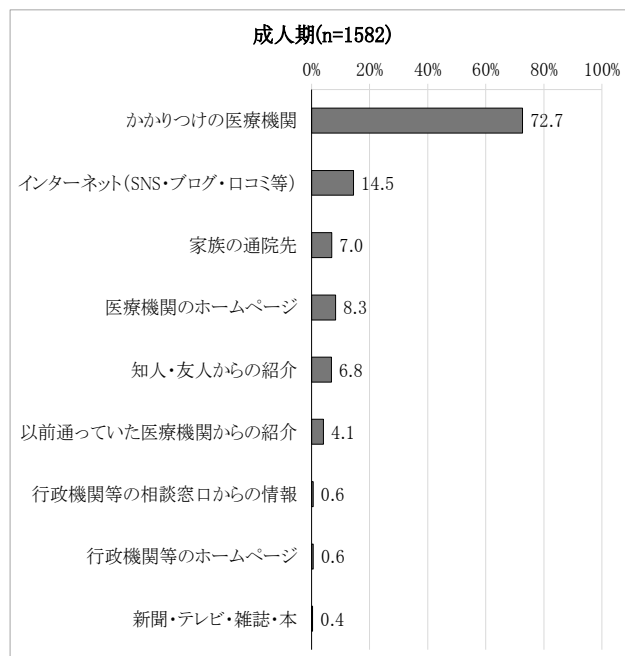
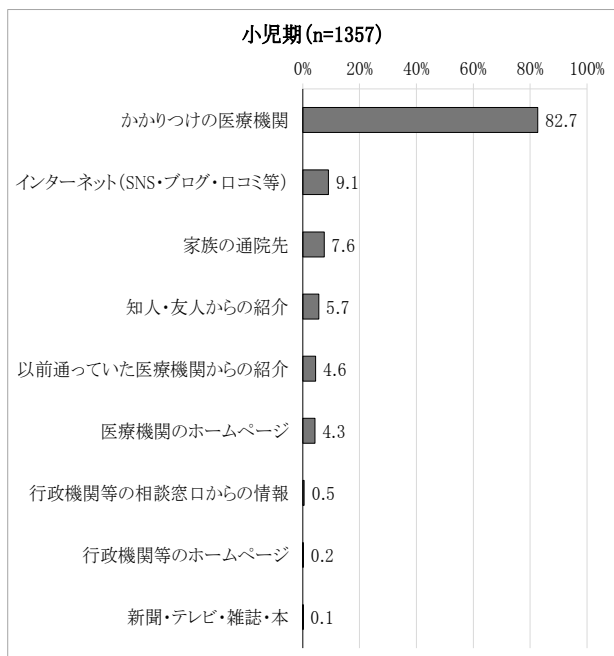


## (2) 患者による医療機関の選定方法の状況

### ①通院している医療機関の選定方法

問：「あなた（成人向け）／お子さま（小児向け）」が現在アレルギー疾患で通院している（していた）医療機関の選定方法をご回答ください。

通院している医療機関はかかりつけの医療機関である割合が小児で8割、成人で7割であったが、「インターネット（SNS・ブログ・ロコミ等）」を選定方法としている場合も1割前後あった。「以前から通っていた医療機関の紹介」で選定された場合は5%前後であった。



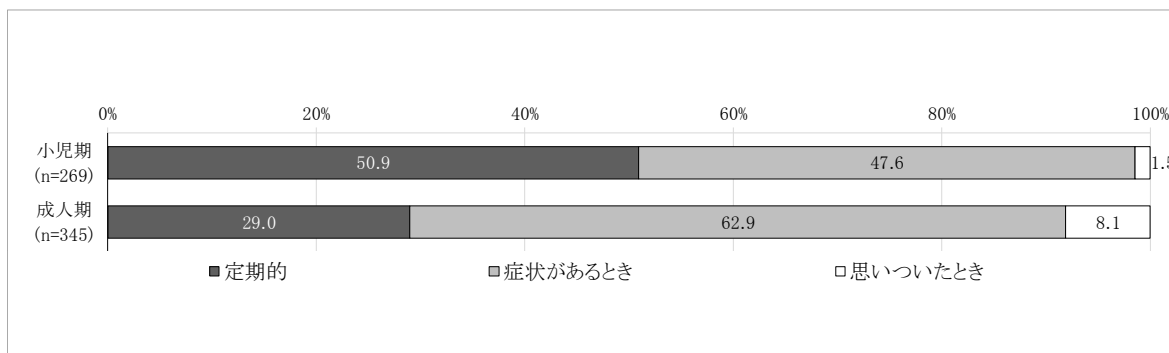
## (3) 患者の受診頻度の状況

### ①現在アレルギー疾患で通院している（していた）医療機関の受診頻度

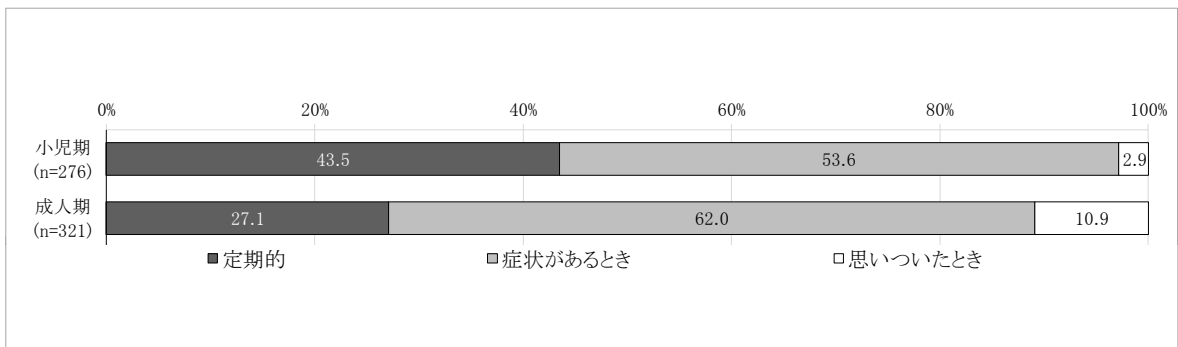
問：「あなた（成人向け）／お子さま（小児向け）」が現在アレルギー疾患で通院している（していた）医療機関の受診頻度をご回答ください。

受診頻度は、小児期の気管支ぜん息を除き、いずれの疾患においても「症状があるとき」が多かった。

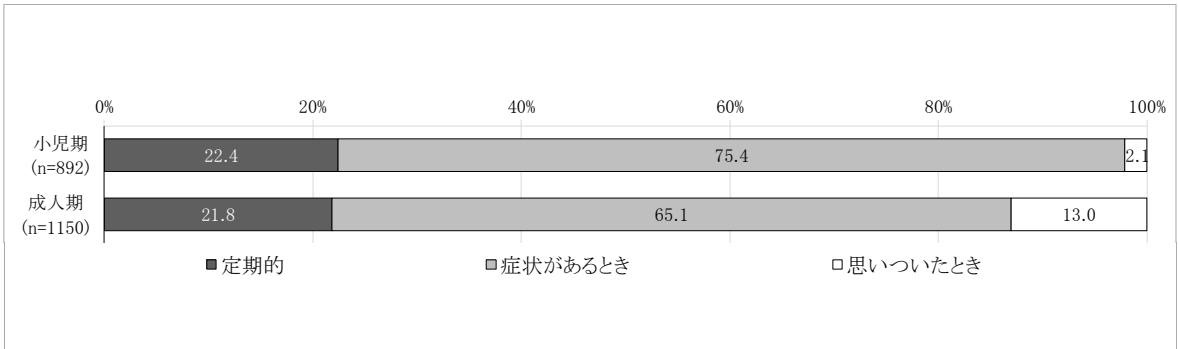
#### a) 気管支ぜん息



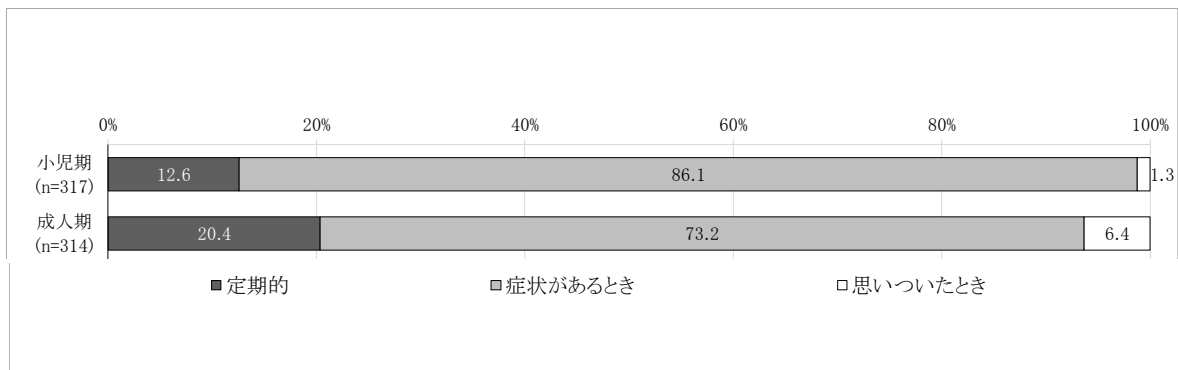
b) アトピー性皮膚炎



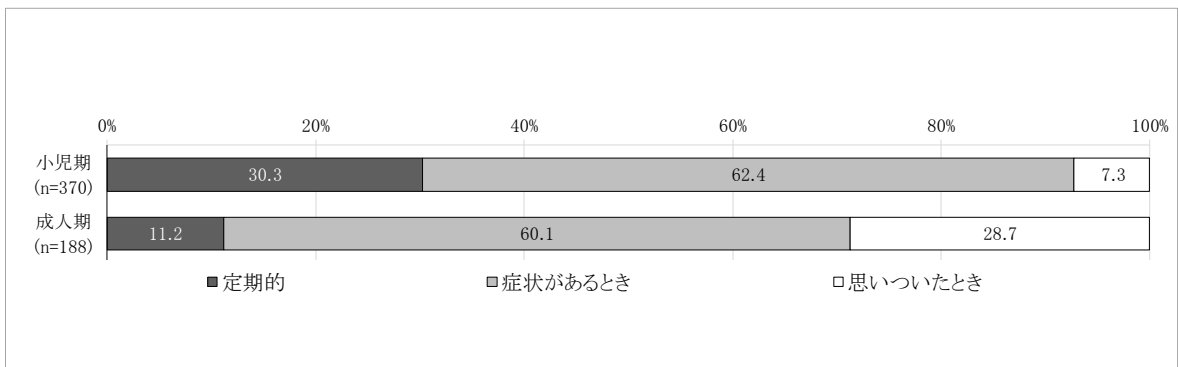
c) アレルギー性鼻炎（花粉症を含む）



d) アレルギー性結膜炎（花粉症を含む）



e) 食物アレルギー

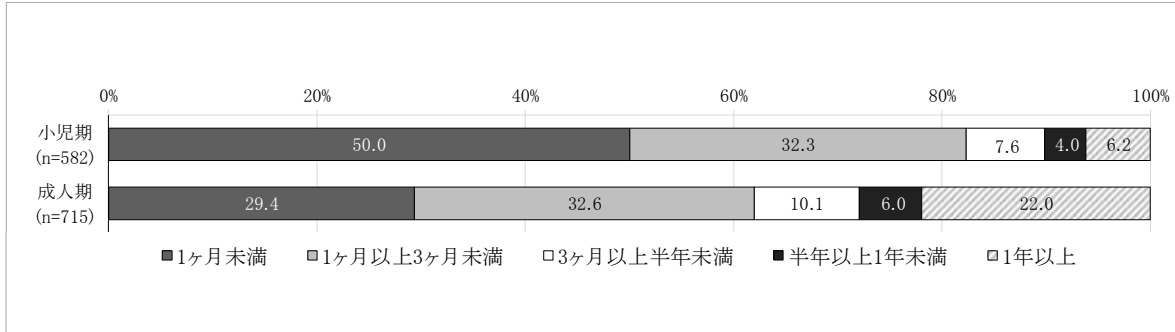


(4) 症状が安定しない場合の発生状況や対応状況

①症状が安定していない期間

問：現在またはこれまでに症状が安定しない状況が続いた期間（最長）をご回答ください。

小児に比べて成人で長期（1年以上）である割合が高かった。

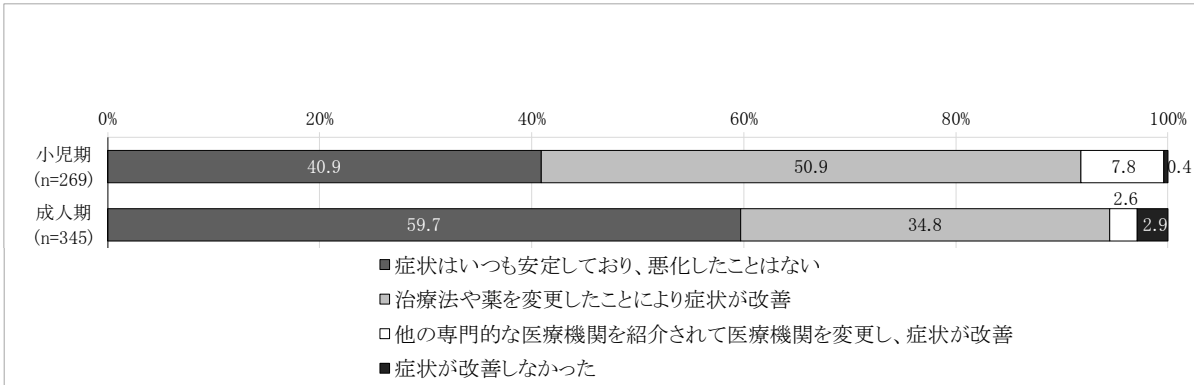


②症状が不安定・悪化した場合の医療機関の対応方法等

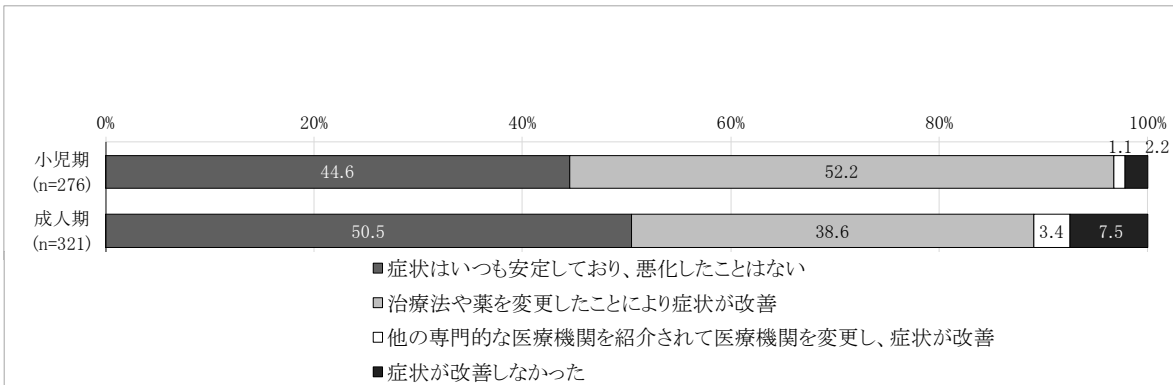
問：これまでに、症状が安定しない場合や悪化した場合、通院している（していた）医療機関でどのように対応され、その後症状がどのように変化したかご回答ください。

気管支ぜん息、アトピー性皮膚炎、アレルギー性鼻炎、アレルギー性結膜炎のいずれの疾患においても、「症状が改善しなかった」場合は1割未満で、「治療法や薬を変更したことにより症状が改善」した割合が高かった。小児の気管支ぜん息では、「他の専門的な医療機関を紹介されて医療機関を変更し、症状が改善」した割合が他の疾患に比べて高く、成人のアトピー性皮膚炎やアレルギー性鼻炎で、「症状が改善しなかった」割合が他の疾患に比べて高かった。

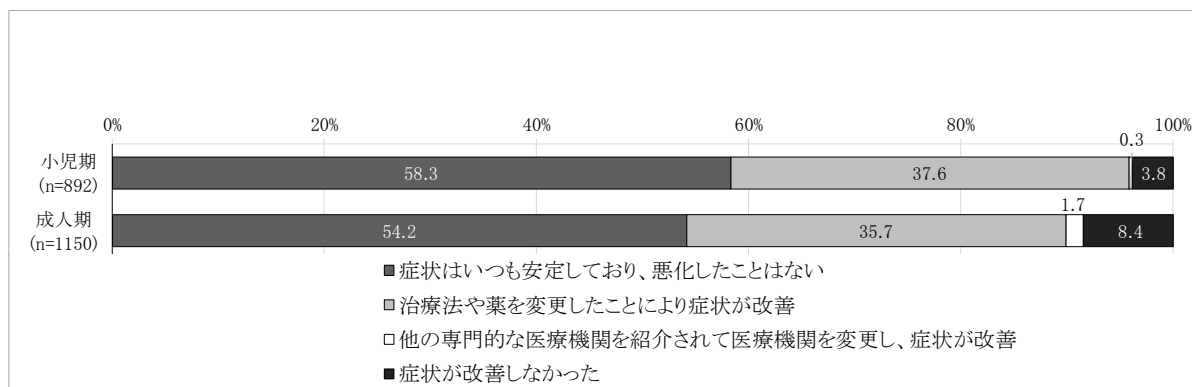
a) 気管支ぜん息



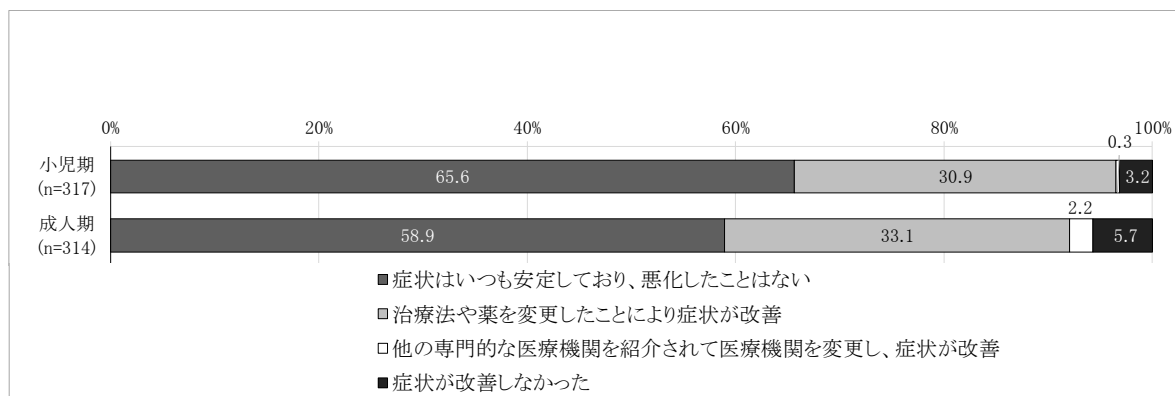
b) アトピー性皮膚炎



c) アレルギー性鼻炎



d) アレルギー性結膜炎



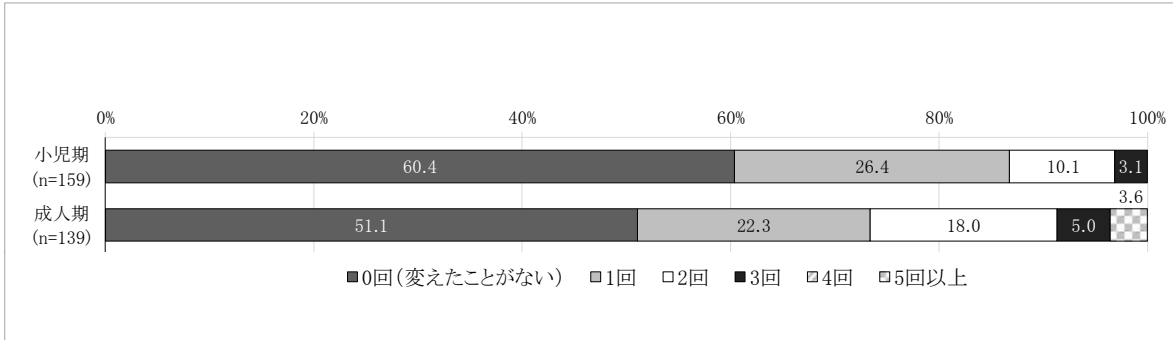


### ③症状が安定しないことなどにより、アレルギー疾患の治療で転院をした回数

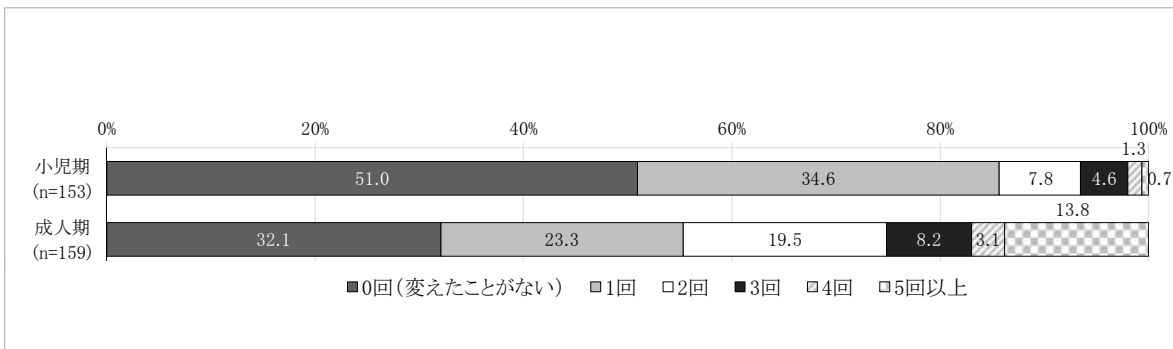
問：症状が安定しないことなどにより、アレルギー疾患の治療でこれまでに医療機関を何回変えたことがありますか。

いずれの疾患においても、「0回（変えたことがない）」の割合が高かった。

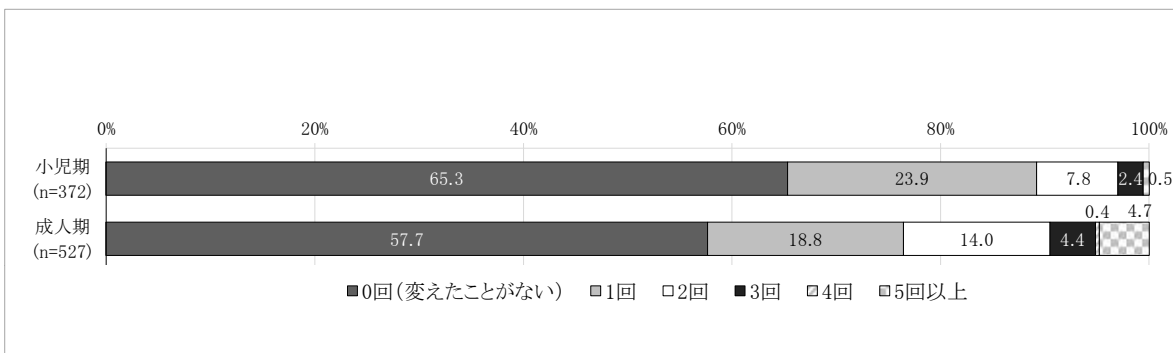
#### a) 気管支ぜん息



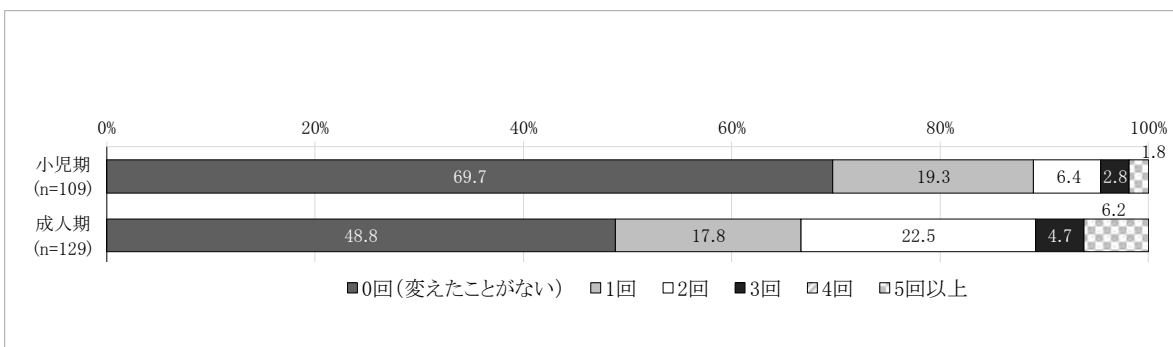
#### b) アトピー性皮膚炎



#### c) アレルギー性鼻炎（花粉症を含む）



#### d) アレルギー性結膜炎（花粉症を含む）



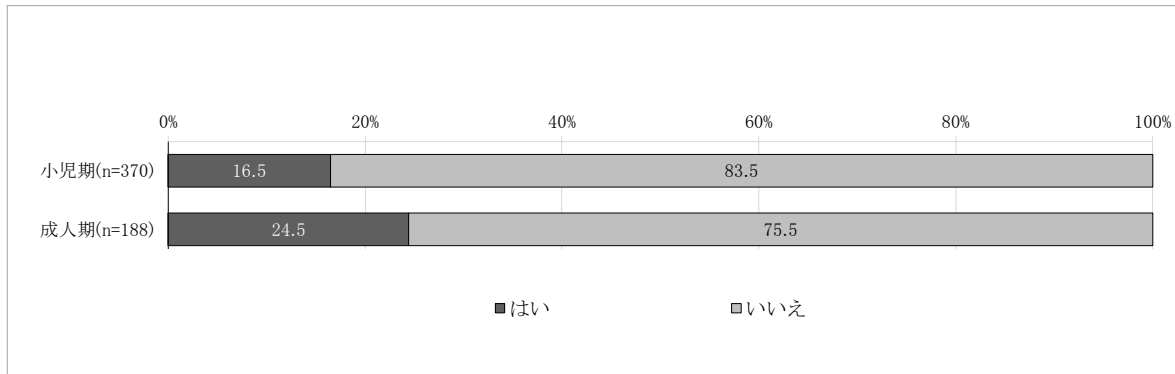
(5) 食物アレルギーの症状が安定しない場合の発生状況や対応状況

食物アレルギーでは治療を進める中で思うように状況が改善しないなどの問題がなかった割合が8割程度であった。食物アレルギーへの対応や検査等として実施した項目としては小児期では「医療機関で血液検査を行った」、成人期では「原因となる食品の摂取をしばらく避けた」の割合が高かった。

① 食物アレルギーの治療における問題点の有無

問：これまで食物アレルギーの治療を進める中で思うように状況が改善しないなど、問題はありましたか。

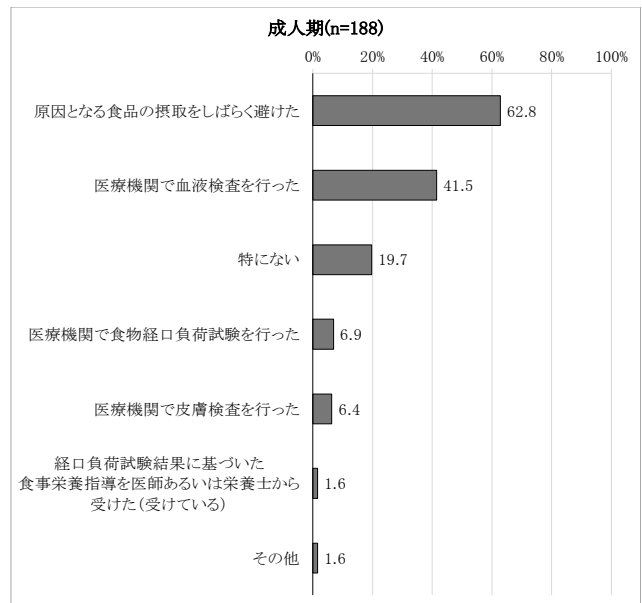
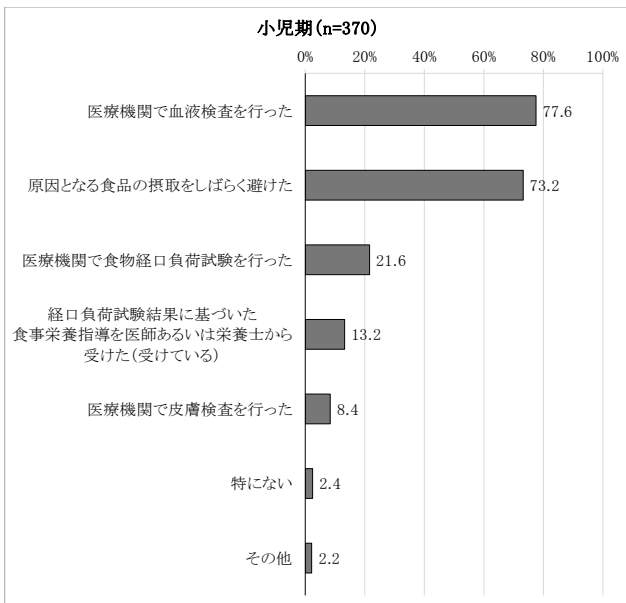
小児期、成人期ともに「いいえ」の割合が高かった（小児期83.5%、成人期75.5%）。また、年代別では、20-39歳で「はい」の割合が26.3%と他の年代よりも高かった。



②食物アレルギーの検査

問：食物アレルギーへの対応や検査等について、当てはまる回答を選択ください。

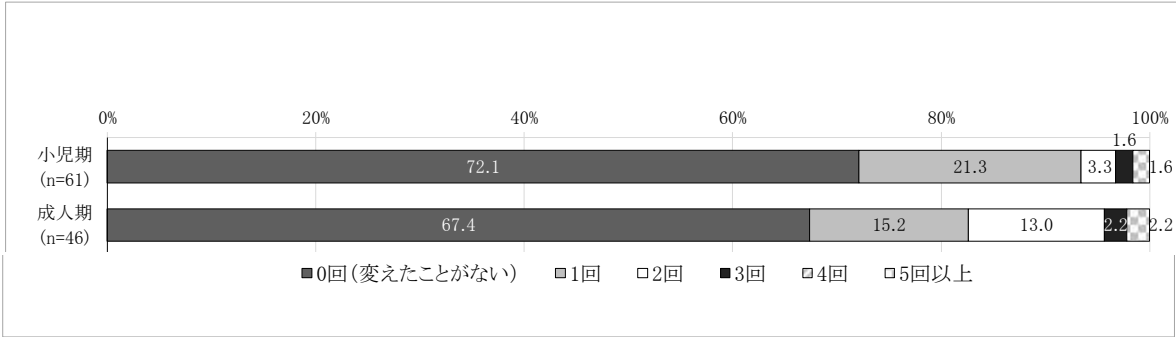
小児期では「医療機関で血液検査を行った」77.6%、成人期では「原因となる食品の摂取をしばらく避けた」62.8%の割合が高かった。



③症状が安定しないことなどにより、食物アレルギーの治療で転院をした回数

問：紹介（転院）回数（食物アレルギー）

小児期、成人期ともに「0回（変えたことがない）」の割合が高かった（小児期 72.1%、成人期 67.4%）。



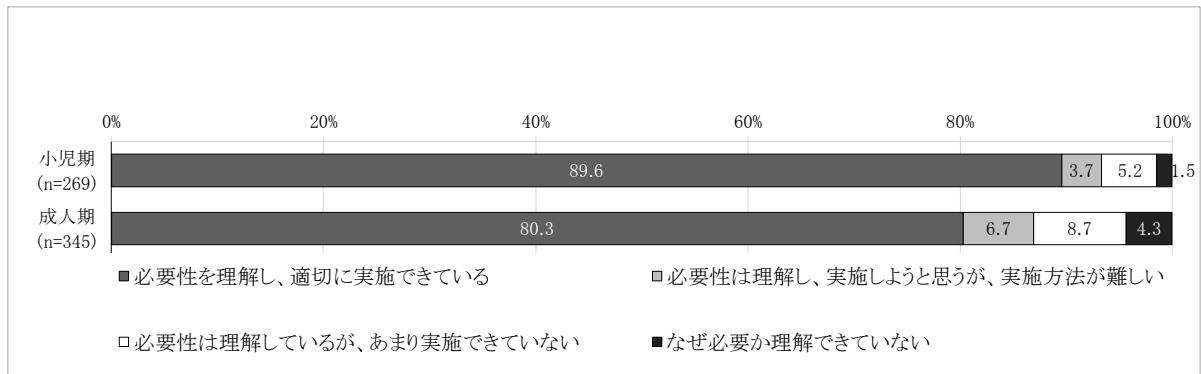
(6) 患者自身で実施する治療等の理解度と実施状況の把握

① 患者自身で実施する治療等の理解度と実施状況

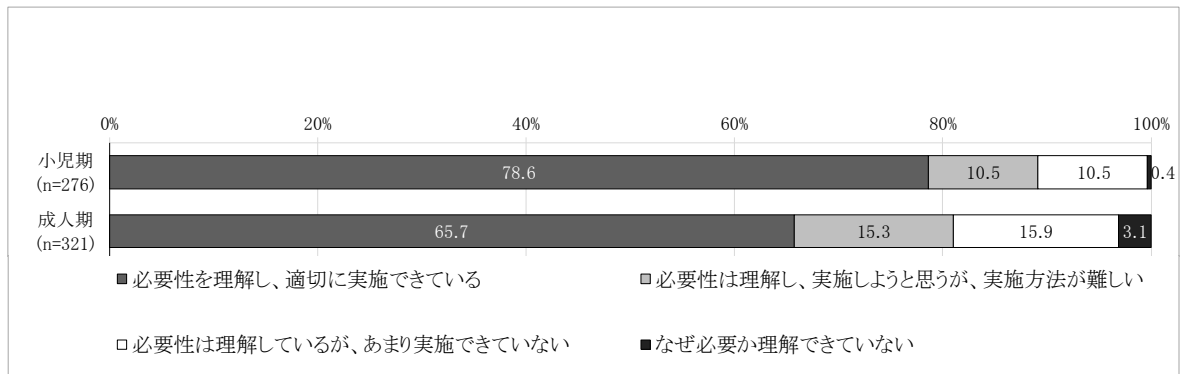
問：ご自身で（成人向け）／お子さまに（小児向け）実施するアレルギー疾患の治療について、必要性や実施方法など、当てはまる回答を選択ください。

患者自身で実施する治療等は、いずれの疾患、治療でも「必要性を理解し、適切に実施できている」割合が6割以上であったが、年代が上がるにつれて「必要性は理解しているが、あまり実施できていない」や「なぜ必要か理解できていない」という割合が増加傾向にあった。

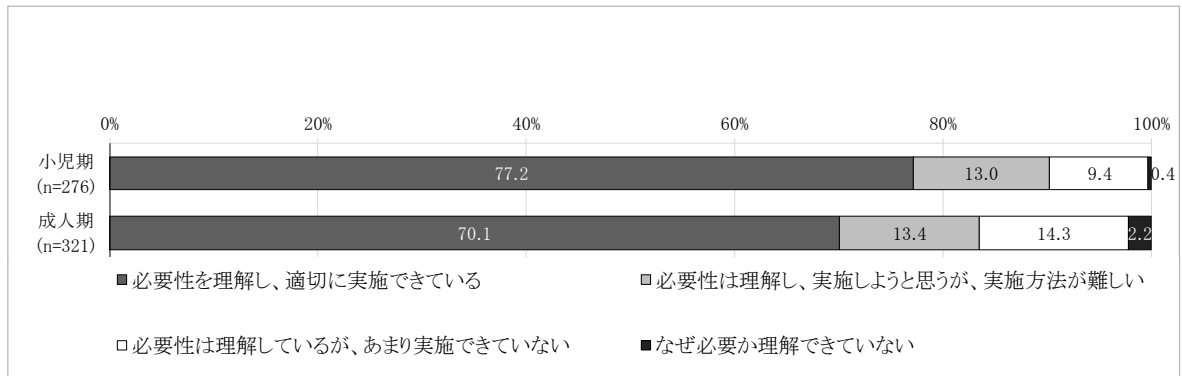
a) 気管支ぜん息（ぜん息薬の吸入）



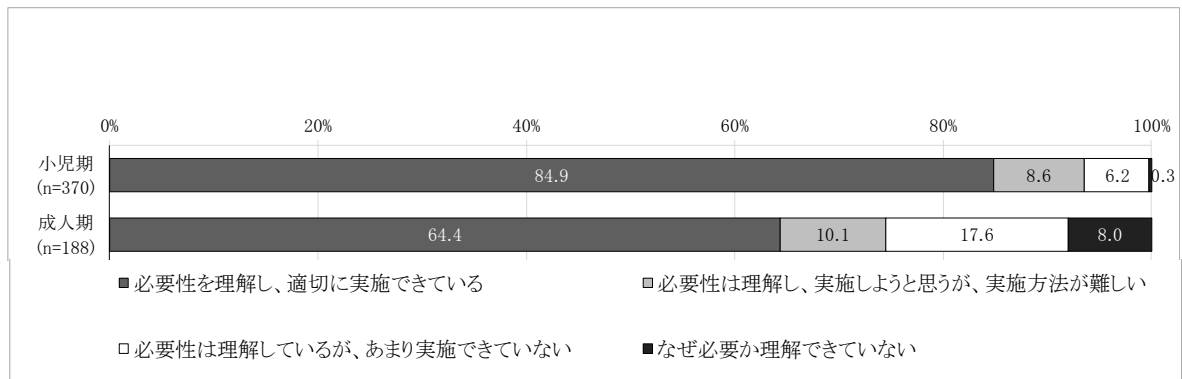
b) アトピー性皮膚炎（スキンケア）



c) アトピー性皮膚炎（外用薬の塗布）



d) 食物アレルギー（アレルギー対応食品の除去・代替食の対応）

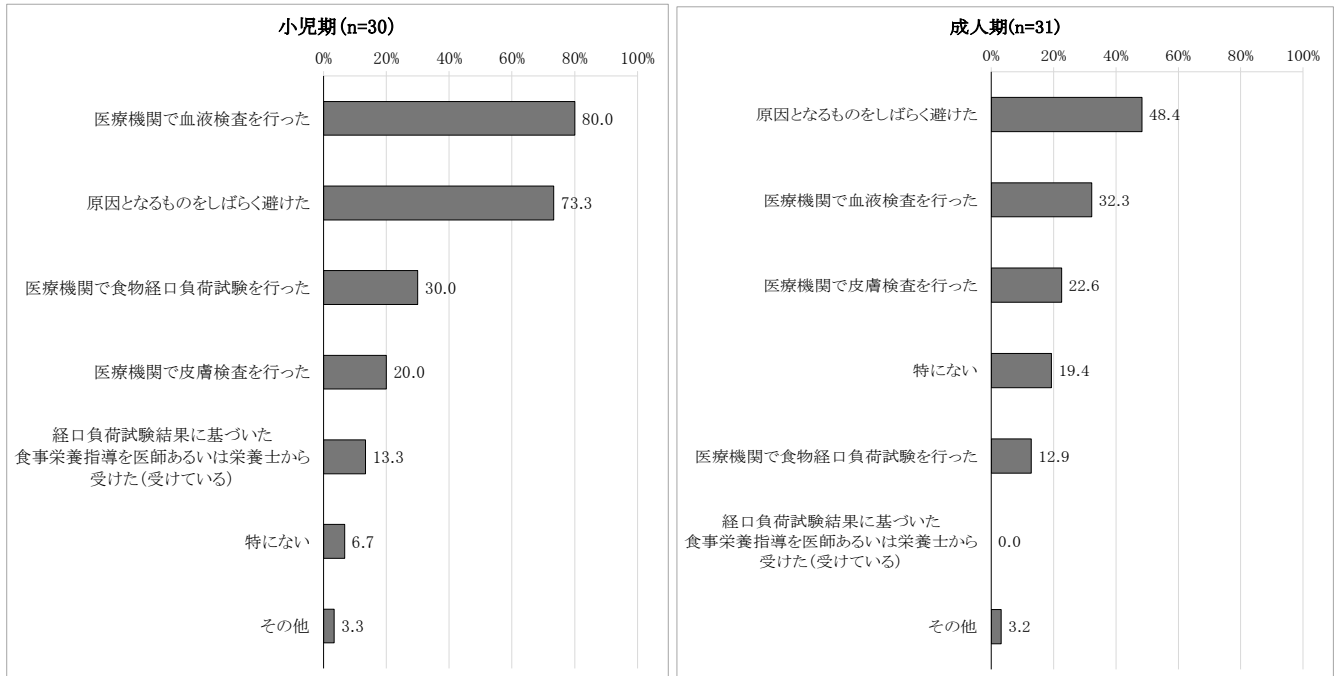


## (7) アナフィラキシーの検査とエピペンの必要性の理解

### ①アナフィラキシーの検査

問：アナフィラキシーへの対応や検査等について、当てはまる回答を選択ください。

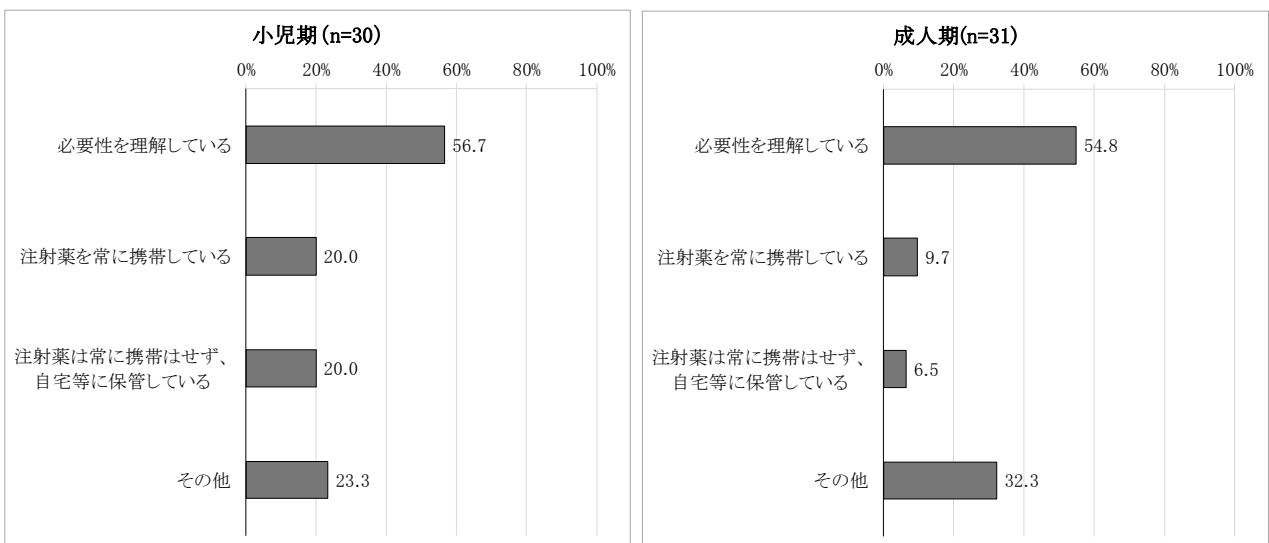
小児期では「医療機関で血液検査を行った」80.0%、成人期では「原因となる食品の摂取をしばらく避けた」48.4%の割合が高かった。



### ②エピペン（アドレナリン自己注射）の必要性や実施方法の理解

問：ご自身で（成人向け）／お子さまに（子供向け）実施するアレルギー疾患の治療について、必要性や実施方法など、当てはまる回答を選択ください。

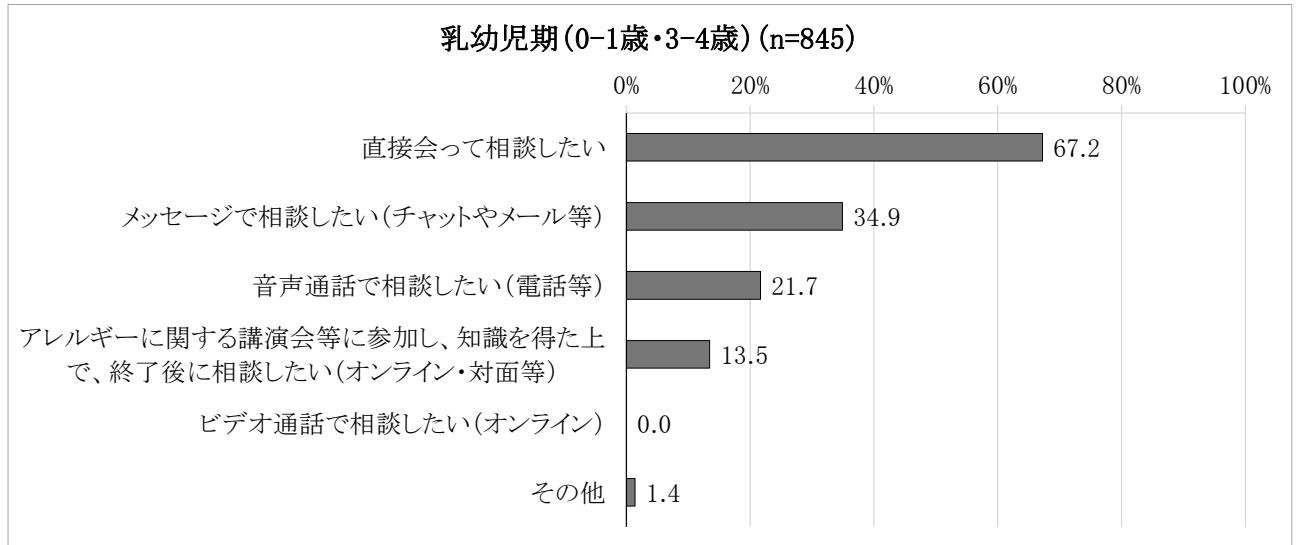
小児期、成人期ともに「必要性を理解し、適切に実施できている」の割合が高かった（小児期 56.7%、成人期 54.8%）。



(8) 乳幼児期のアレルギー疾患について (0-1歳・3-4歳に対する問)

①乳幼児期のアレルギー疾患に関する相談方法 (医療機関以外)

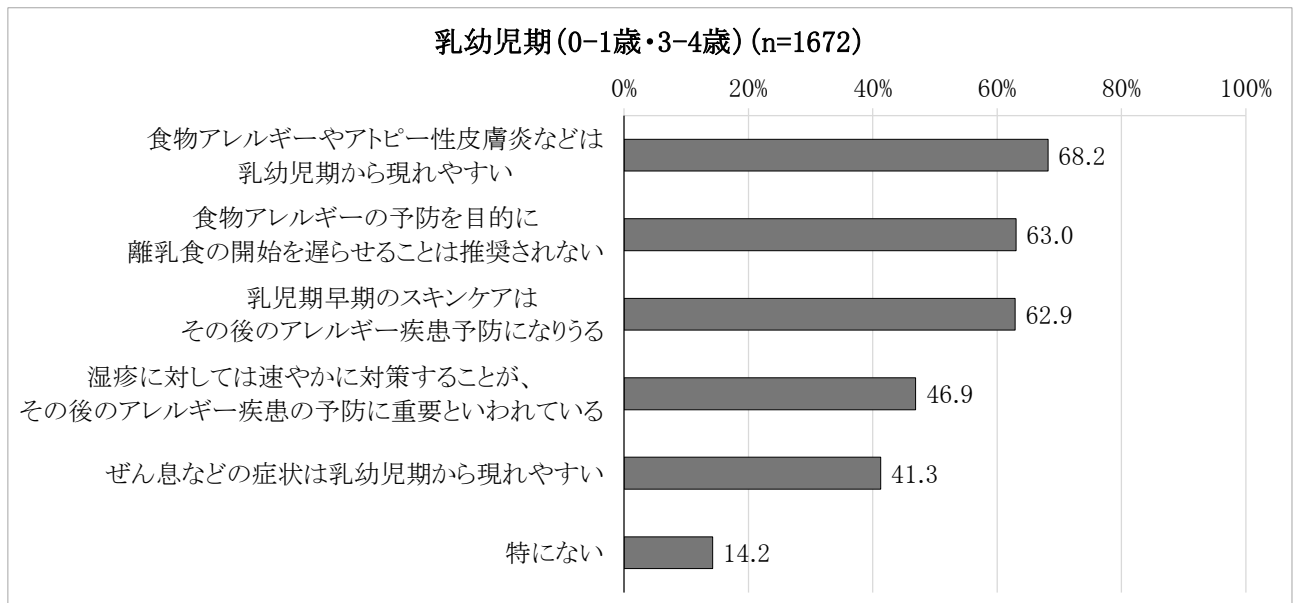
問：相談している (したい) 内容について、医療機関以外の窓口で、どのような方法で相談したいか回答ください。



②乳幼児期のアレルギー疾患対策の理解度

問：乳幼児期のアレルギー疾患対策について、国内の研究結果等により以下のようなことが報告されていますが、ご存じのことを選択ください。

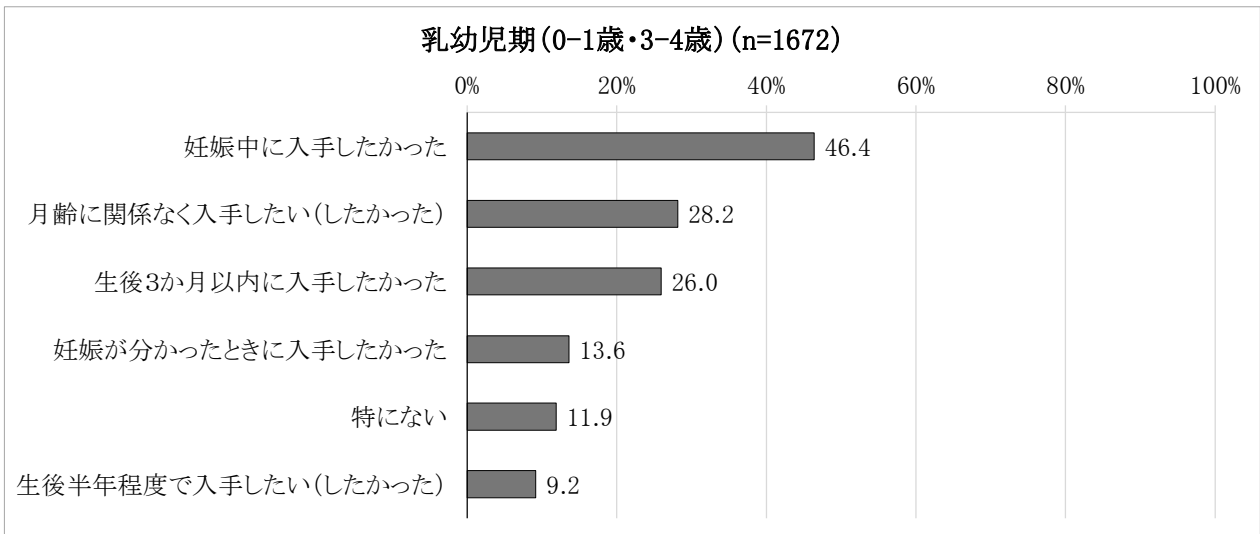
「食物アレルギーやアトピー性皮膚炎などは乳幼児期から現れやすい」「食物アレルギーの予防を目的に離乳食の開始を遅らせることは推奨されない」「乳児期早期のスキンケアはその後のアレルギー疾患予防になりうる」について、6割以上の回答者が知っていた。



### ③乳幼児期のアレルギー疾患に関する情報の入手に望ましい時期

問：乳幼児期のアレルギー疾患に関する情報の入手に望ましい時期を選択ください。

アレルギーに関する情報を「妊娠中に入手したかった」との回答が半数近くあった。

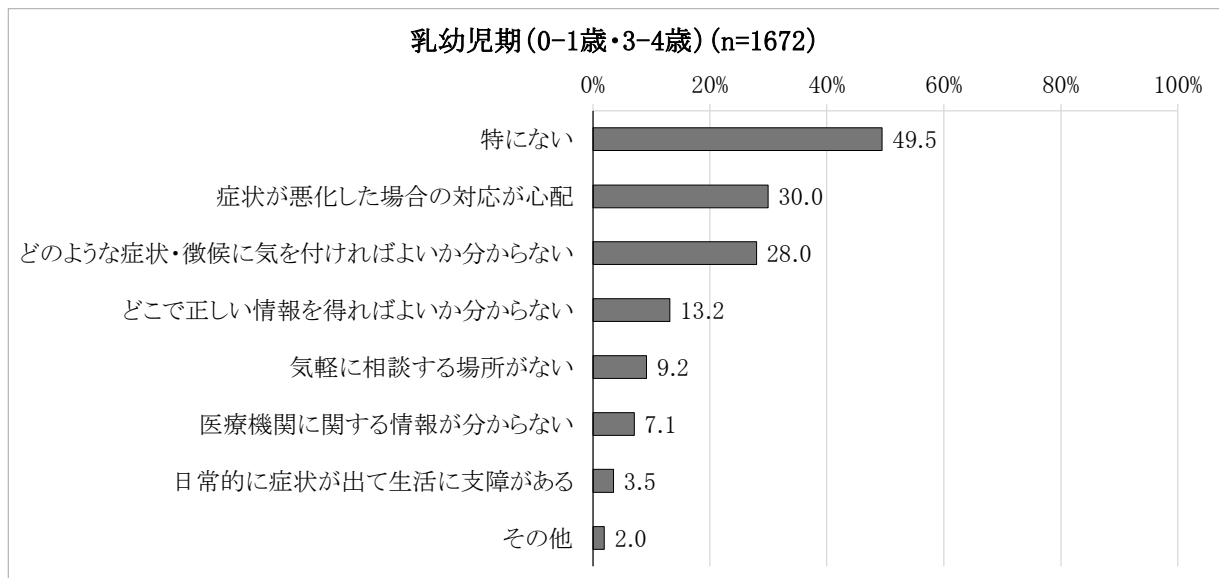


### (9) アレルギーに関する市民の情報ニーズ

#### ①アレルギー疾患で困っている・心配なこと

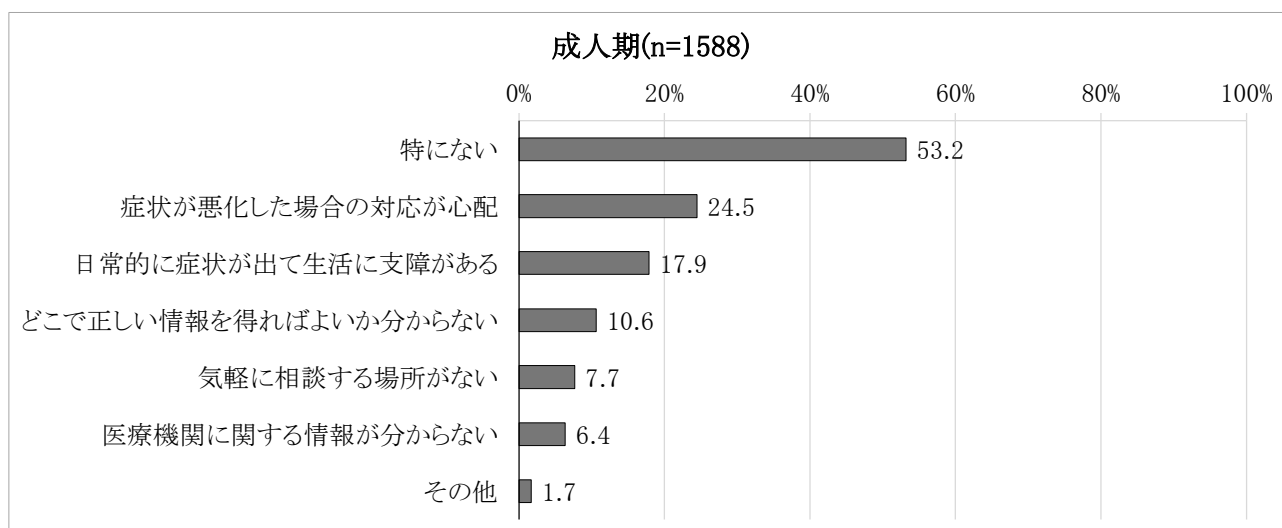
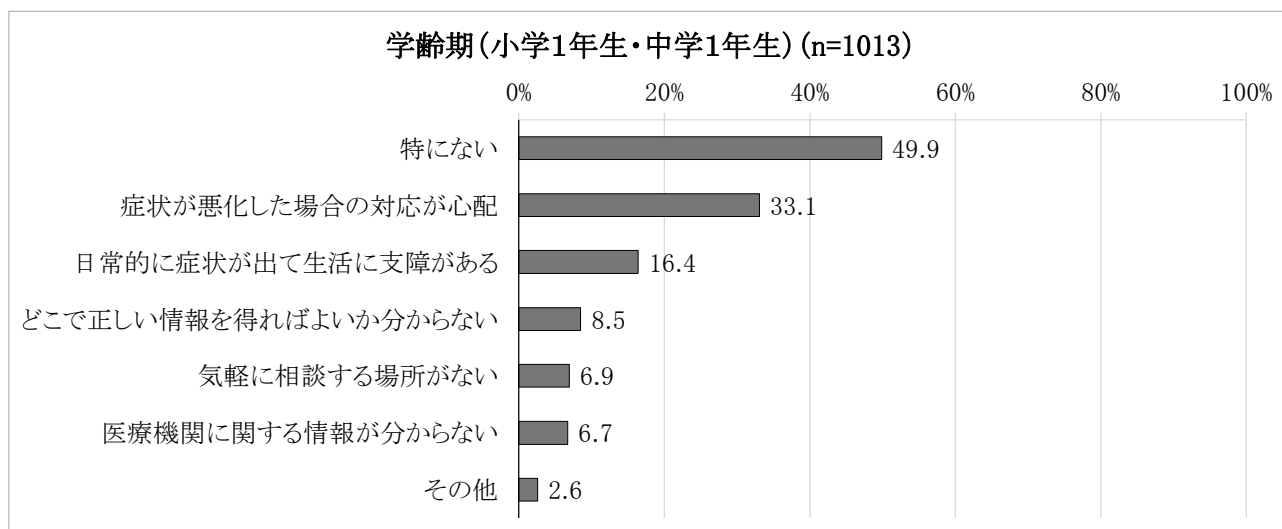
問：お子さまのアレルギー疾患や気になる症状、日常生活の過ごし方等について心配なことや困っていることを選択ください。(0-1歳・3-4歳に対する問)

乳幼児期、学齢期、成人期のいずれにおいても「特にない」の割合が最も高かった。



**学齢期・成人のアレルギー疾患で困っていること（小学1年生・中学1年生・成人に対する問）**

問：ご自身の（成人向け）／お子さまの（小児向け）アレルギー疾患について、困っていることはありますか。（小学1年生・中学1年生・成人に対する問）



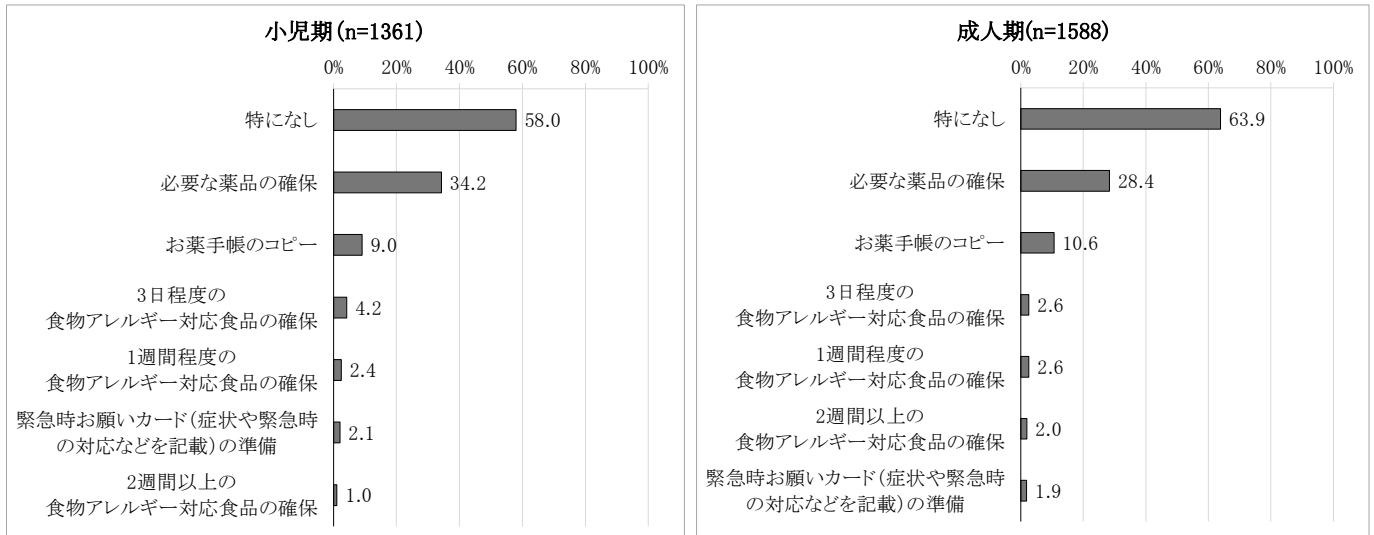
※乳幼児期と学齢期及び成人期で異なる選択肢を設定した。選択肢「どのような症状・兆候に気をつければよいか分からない」は乳幼児期に対する問でのみ設定した。



## ②アレルギー疾患に関連した災害時のための準備

問：災害時のためのアレルギー疾患対策について、日頃、準備していることを選択ください。

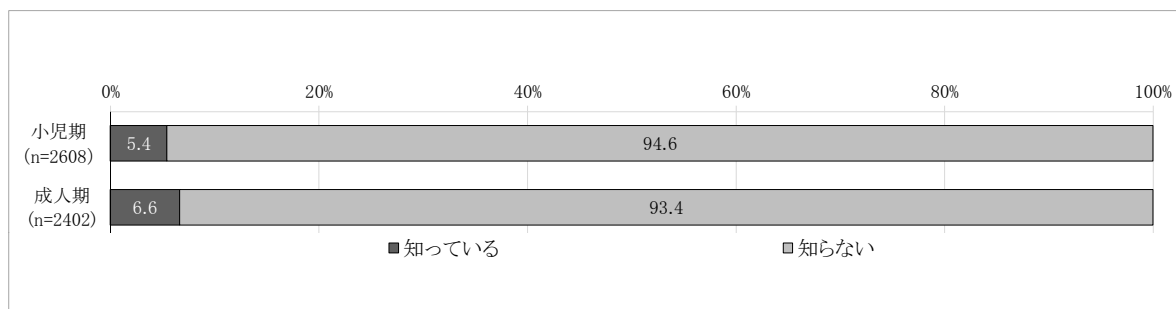
小児期、成人期ともに「特になし」の割合が高く（小児期 58.0%、成人期 63.9%）、次いで「必要な薬品の確保」の割合が高かった（小児期 34.2%、成人期 28.4%）。また、年代別では、65 歳以上で「必要な薬品の確保」「お薬手帳のコピー」の割合が他の年代よりも高かった。



## ③神奈川県が指定している病院の認知度

問：アレルギー疾患の専門的な医療を提供する医療機関として、県が指定している神奈川県アレルギー疾患医療拠点病院や川崎市内の県指定病院をご存知ですか。

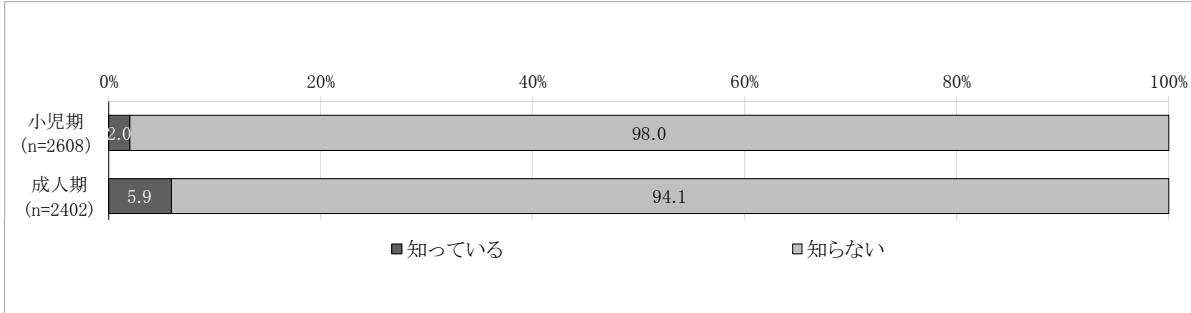
小児期、成人期ともに「知らない」の割合が高かった（小児期 94.6%、成人期 93.4%）。また、年代別では、20-39 歳で「知っている」の割合が 8.4%と他の年代よりも高かった。



#### ④ 「川崎市アレルギー疾患関連ポータルサイト」の認知度

問：川崎市が令和5年7月に開設したホームページ『川崎市アレルギー疾患関連ポータルサイト』をご存知ですか。同封のチラシからホームページをご覧ください。

小児期、成人期ともに「知らない」の割合が高かった（小児期98.0%、成人期94.1%）。また、年代別では、20-39歳で「知っている」の割合が8.4%と高かった。



#### ⑤ 川崎市のアレルギー疾患対策に対する要望

問：川崎市のアレルギー疾患対策に対する要望を選択ください。

川崎市のアレルギー疾患対策については、「治療法や日常生活上の留意事項に関するインターネットや紙面での情報発信」や「適切な治療を受けることができる体制づくり」の割合が高かった。

